

令和5年度 単位互換授業履修対象科目（後期）一覧

構成機関名
(秋田公立美術大学)

No.	ページ	授業科目名	担当教員	単位数	学期 ()内初日	受入数	学部等	曜日/時限	備考
1	7-1	日本建築史 2	石渡 雄士	2	後期(10/2)	若干名	美術学部美術学科	月曜/1時限	
2	7-2	近代デザイン史特講	天貝 義教	2	後期(10/3)	若干名	美術学部美術学科	火曜/2時限	
3	7-3	デザイン史	天貝 義教	2	後期(10/4)	若干名	美術学部美術学科	水曜/1時限	
4	7-4	西洋美術史	天貝 義教	2	後期(10/4)	若干名	美術学部美術学科	水曜/2時限	
5	7-5	シルクロード図像学 2	井上 豪	2	後期(10/4)	若干名	美術学部美術学科	水曜/3時限	
6	7-6	近代絵画史	岩井 成昭	2	後期(10/5)	若干名	美術学部美術学科	木曜/3時限	

【注意事項】

聴講にあたっては、該当科目のシラバスをご確認ください。

『特別聴講学生入学願』の提出期日： 令和 5 年 9 月 15 日 (金)

シラバス参照

講義名	日本建築史 2
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	月曜日 1 限目
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	2・3 年次後期

担当教員

氏名
◎ 石渡 雄士

前提とする授業、密接に関係する授業	「日本建築史 1」と関係するが必須ではない。「日本建築史 1」は古代～中世、「日本建築史 2」は近世の都市や建築物を主な対象としており、両者を受講することで日本建築史の全体像が理解できる構成となっている。
授業に関連するキーワード	古建築の構造、様式、都市空間と成り立ち。
授業の到達目標及びテーマ	主に近世を対象としたわが国の建築や都市を歴史的に理解する。建築や都市の歴史を基礎知識として身に付けるとともに、それ等を正しく人に伝えることが出来るようになること。
授業の概要	主に近世を対象として、わが国の建築や都市の歴史的な理解を深め、各時代の建築様式の変化や都市や地域の成り立ちなどについて学ぶ。また、日本建築史の理解を深め、視野を広げるために関連する西洋建築史や近代建築史、現代建築等についても扱う。
授業計画	<p>授業計画 以下の構成で講義を進めるが、進捗状況などにより順序やテーマを変える場合がある。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 城郭建築の歴史と形態 第3回 城下町の歴史と空間構造 第4回 近世の武士住宅(大名屋敷と侍屋敷) 第5回 近世の武士住宅(書院造) 第6回 茶室建築 第7回 数寄屋建築 第9回 霊廟 第10回 能舞台と劇場建築 第11回 町屋建築 第12回 農家建築 第13回 近世の都市(宿場町、在郷町) 第14回 近世の都市(港町) 第15回 まとめ</p> <p>○実務経験のある教員等による授業科目に該当</p>
授業時間外の学習内容等	配布資料および参考文献等を読みことに加えて、実際に授業で取り上げた都市や建築物を訪れて理解を深める。
評価方法	期末レポート 100%
テキスト	授業内に適宜プリントを配布する。
参考書・参考資料等	授業内で紹介する。

シラバス参照

講義名	近代デザイン史特講
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	火曜日 2 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	3・4 年次後期

担当教員

氏名
◎ 天貝 義教

前提とする授業、密接に関係する授業	「デザイン史」「近代装飾デザイン史」「デザイン史特講義」と内容が関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照。
授業の到達目標及びテーマ	この授業では、20世紀のモダン・アートとモダン・デザイン運動において重要な役割を演じたバウハウスについて、その歴史と世界的影響を論じ、その今日的意義を考えることを通じて、デザインの社会的についての理解を深めることを目的とする。
授業の概要	バウハウスの理念について、第一次大戦後のドイツにおけるバウハウスの創立と閉鎖から、第二次大戦後のドイツとアメリカ合衆国における展開にいたるまで、具体的事例にもとづいて概説する。
授業計画	<p>第1回 使用するテキストについての説明</p> <p>第2回 ヴァイマルにおけるバウハウス (1)</p> <p>第3回 ヴァイマルにおけるバウハウス (2)</p> <p>第4回 デッサウにおけるバウハウス (1)</p> <p>第5回 デッサウにおけるバウハウス (2)</p> <p>第6回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革 (1)</p> <p>第7回 ハンネス・マイアーのバウハウス改革 (2)</p> <p>第8回 バウハウスの閉鎖とバウハウス人たちのアメリカ移住</p> <p>第9回 モホイ・ナジのニュー・バウハウス</p> <p>第10回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (1) ウルム造形大学</p> <p>第11回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (2) 具体芸術と外的環境形成の理論</p> <p>第12回 ドイツにおけるバウハウスの継承 (3) インダストリアル・デザインの概念</p> <p>第13回 アルパースとブラック・マウンテンカレッジ (1)</p> <p>第14回 アルパースとブラック・マウンテンカレッジ (2)</p> <p>第15回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	配布テキストならびに紹介した参考図書にもとづいて予習と復習をおこなうことが必要である。
評価方法	授業への取組み (40%)、レポート (60%) を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	配布したテキストをもとに、専門用語 (日本語ならびに外国語) について理解を深めておくことが必要である。
テキスト	授業時に配布する。
参考書・参考資料等	テキスト以外の参考資料・図書は授業において適宜紹介する。

シラバス参照

講義名	デザイン史
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	水曜日 1 時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	1・2 年次後期

担当教員

氏名
◎ 天貝 義教

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」「デザイン史特講」「近代装飾デザイン史」「近代デザイン史特講義」と内容が関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照。
授業の到達目標及びテーマ	産業革命以降のヨーロッパ、アメリカ、日本などのデザインに関する基礎的な知識を理解するとともに、その歴史を学ぶことによって、デザインについての基礎概念を身につけることを目指す。
授業の概要	この授業では近代デザインの画期的な歴史的事項を概説するとともに、それらの背景にある主要なデザイン理論をとりあげて、その今日的意義を考察する。
授業計画	<p>第1回 デザイン史を学ぶ意義について</p> <p>第2回 産業革命における技術革新と造形意識の変化</p> <p>第3回 芸術と産業 (1) : 万国博覧会と近代デザイン</p> <p>第4回 芸術と産業 (2) : モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動</p> <p>第5回 芸術と産業 (3) : ウィーンにおける応用美術の振興</p> <p>第6回 歴史主義からの脱却 : アール・ヌーヴォーとセセッション運動</p> <p>第7回 様式主義から規格化へ : ドイツ工作連盟の設立とその理念</p> <p>第8回 1920年代の動向 (1) : バウハウスの設立</p> <p>第9回 1920年代の動向 (2) : バウハウスの発展</p> <p>第10回 1920年代の動向 (3) : 近代デザインとモダン・アートの交流</p> <p>第11回 アメリカにおける近代デザイン : ビジネスとしてのデザインの発展</p> <p>第12回 第二次世界大戦前の日本 : 応用美術と意匠図案の国家的振興</p> <p>第13回 第二次世界大戦後の日本 : 戦後の復興と近代デザイン理念の普及</p> <p>第14回 ポスト・モダニズム以降 : デザイン概念の拡張とデザインのモラル</p> <p>第15回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	教科書ならびに参考書を熟読し、予習と復習をおこない、講義内容の理解を深める。
評価方法	授業への取組み (40%)、レポート (60%) を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	教員免許状取得のための選択科目。
テキスト	阿部公正『増補新装 カラー版 世界デザイン史』美術出版社 2012 ISBN-13 : 978-4568400847
参考書・参考資料等	出原栄一『日本のデザイン運動—インダストリアルデザインの系譜 増補版』ペリかん社 1992 ISBN-13 : 978-4831505613

シラバス参照

講義名	西洋美術史
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	水曜日 2時限
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	1・2年次後期

担当教員	
氏名	
◎ 天貝 義教	

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」と関連している。
授業に関連するキーワード	各回の表題を参照
授業の到達目標及びテーマ	古代ギリシアから二十世紀にいたるまでの西洋美術を特徴づけるもののひとつとしてパースペクティヴ (Perspective) がある。パースペクティヴの考え方はルネサンス期に確立したが、二十世紀にいたって批判の対象となった。本講義では、ルネサンス、バロック、十九世紀、二十世紀におけるパースペクティヴに関わる主要な作家の議論と作品を取り上げ、西洋美術におけるパースペクティヴの歴史的意義とともにその今日的な意義を探る
授業の概要	本講義では、15世紀のL. B. アルベルティ、バロック期のアンドレア・ポツォ、19世紀初頭のJ. M. W. ターナー、20世紀前半のエル・リシツキーらによるPerspectiveに関する主要な議論を順次取り上げて、壁画・天井画・タブロー画・空間形成におけるPerspectiveの意義の変化を概説してゆく。
授業計画	<p>第1回 はじめに Perspectiveとは何か。 「視的ピラミッド」と「その切断」とは何か。</p> <p>第2回 ルネサンス期のイタリアにおけるPerspectiveの成立 (1) L. B. アルベルティの『絵画論』以前</p> <p>第3回 ルネサンス期におけるPerspectiveの成立 (2) L. B. アルベルティの『絵画論』</p> <p>第4回 ルネサンス期におけるPerspectiveのイタリアにおける広がり</p> <p>第5回 ルネサンス期におけるPerspectiveの探求 (1) ピエロ・デラ・フランチェスカを中心に</p> <p>第6回 ルネサンス期におけるPerspectiveの探求 (2) イタリアから北方へ アルブレヒト・デューラーを中心に</p> <p>第7回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (1) ローマにおけるアンドレア・ポツォを中心に</p> <p>第8回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (2) ローマからウィーンへ</p> <p>第9回 バロック期におけるPerspectiveの発展 (3) 天井画の伝統 イタリア・ジェノバを中心に中心に</p> <p>第10回 19世紀初頭におけるPerspectiveの展開 Perspectiveの理論家としてのターナー</p> <p>第11回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (1) エル・リシツキーの空間デザイン 想像上の空間へ</p> <p>第12回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (2) フランスのフォービズムとキュビズム</p> <p>第13回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (3) イタリアの未来派</p> <p>第14回 20世紀前半におけるPerspectiveからの脱却 (4) アブストラクト・アート モンドリアンを中心に</p> <p>第15回 まとめ</p>
授業時間外の学習内容等	各回の講義内容について、予習と復習を行なうことが求められる。
評価方法	授業への取組み (40%) とレポート (60%) を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。
履修上の注意	この授業では「視的ピラミッドの切断」など、L. B. アルベルティの絵画論、アンドレア・ポツォの教則本、J. M. W. ターナーの講義、エル・リシツキーの空間デザイン論などにみられるPerspectiveに関わる専門的な用語を使うので、これらの用語とともに、取り上げる芸術家について予習しておくことが必要である。
テキスト	テキストは特に定めない。
参考書・参考資料等	アルベルティ著・三輪福松訳『絵画論』中央公論美術出版 アレクサンダー・ドルナー著・嶋田厚監訳『<美術>を超えて』勁草書房

シラバス参照

講義名	シルクロード図像学 2
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	水曜日 3 時限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	3・4 年次後期

担当教員	
氏名	
◎ 井上 豪	

前提とする授業、密接に関係する授業	「美術理論・美術史」「シルクロード図像学 1」と一部内容が関連している。
授業に関連するキーワード	シルクロード 仏教美術
授業の到達目標及びテーマ	インドに発した仏教美術はシルクロードを東へ向かい、沙漠を越えて中国に伝えられた。隊商路として栄えた西域のオアシス地帯は、多彩な文化が常に混じり合う「民族の十字路」であった。 本講義は、前期に開講する「シルクロード図像学 1」のいわば後編として、楼蘭・亀茲などタリム盆地の仏教美術を中心に取り上げる。特に代表作例として石窟壁画に焦点を当て、個々の画題を考察しながら、背後にある仏教思想やオアシスの古代文化など、多角的な視点で古代美術の世界について解説する。
授業の概要	遺跡全体から見た古代美術のあり方、壁画の各テーマから読み取れる美術の変容や文化的背景の検証、細部描写から再現される古代風俗の姿など、複数の視点から西域美術の図像を考察する。講義には配付資料とスライドを用い、幅広い視野で古代美術を捉えていきたい。
授業計画	<p>授業計画</p> <p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2回 楼蘭王国とミーラン遺跡</p> <p>第3回 古代ホータンの信仰と図像</p> <p>第4回 クチャ・キジル石窟の形式と壁画</p> <p>第5回 壁画の主題解釈「国王の帰依」</p> <p>第6回 壁画の主題解釈「女人の供養」</p> <p>第7回 壁画の主題解釈「出家の修行と在家の布施」</p> <p>第8回 図像の継承～型と粉本</p> <p>第9回 山岳図と本生図</p> <p>第10回 天象図とオアシスの自然観</p> <p>第11回 寄進者像からみたシルクロードの服飾</p> <p>第12回 涅槃図とその周辺</p> <p>第13回 舍利容器と骨臓器</p> <p>第14回 贋作の図像学</p> <p>第15回 まとめ</p> <p>※場合により一部入替や変更もありうるので了承されたい。</p>
授業時間外の学習内容等	図書館蔵書等の資料を読むことで授業を振り返り、理解を深める。
評価方法	試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。
履修上の注意	講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。
テキスト	内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。
参考書・参考資料等	必要に応じ講義の中で紹介する。

シラバス参照

講義名	近代絵画史
(副題)	
講義区分	講義
基準単位数	2
時間割	木曜日3限
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目
履修区分	選択科目
配当年次・学期	1、2年次後期

担当教員

氏名	
◎ 岩井 成昭	

オフィスアワー	不定期ですがメールで連絡を受け付け、日時を調整します。
授業に関連するキーワード	絵画空間、西洋美術、日本美術、現代美術、絵画技法、モダニズム、ポストモダニズム
授業の到達目標及びテーマ	<p>近代の定義は国家や地域、基盤とする文脈によって大きく異なるが、この講義では、19世紀から20世紀を広義の近代とし、主に市民社会、資本主義社会の発展の中で、西洋美術を中心に絵画において何が主題となり、どのような技法で表現されたのかを、同時代の多様な美術潮流の解説や後世の現代美術に与えた影響と関連づけながら考察していく。また、日本画をはじめとする国内の絵画と西洋絵画の影響関係にも言及する。</p> <p>本学には現代美術を専門的に概括する講義がないことから、本講義がその一助となるように現代美術への流れを意識した絵画作品の解説や、現代の作品そのものについても解説する。現代美術における問題意識の多くは近代に形成されており、近代の美術思想は絵画を中心に展開していたことを理解する。</p>
授業の概要	<p>全体を通じて、近代における美術史、絵画史上の大きな変化がなぜ起こったのか？その要因となった作品はどのような意義と意味があるのか？その社会的、思想的な背景はなにか？・・・といった問いに対して、美術作家、美術潮流、流派のデータや作品の画像をもとに解説していく。また、断続的に制作者（担当教員は「作り手」であることから）の立場から、特徴的な絵画技法について解説する時間を割く予定。聴講時のポイントを押さえるためのガイドラインとして、講義のテーマごとの要点を質問形式で記した「Question Note」を授業毎に配布する。</p>
授業計画	<p>第1回 美術史の大きな流れと近代絵画史への理解を促す基礎的な用語の解説 第2回 西洋近代絵画史における絵画技法の変化 第3回 欧州における近代絵画の発祥 新古典主義／ロマン主義／写実主義 第4回 ジャポニズムの影響① 印象派の形成 第5回 ジャポニズムの影響② 後期印象派／ナビ派／アール・ヌーヴォー 第6回 抽象絵画への移行① セザンヌ／キュビズム／オルフィスム 第7回 抽象絵画への移行② 表現主義的絵画（フォービズム／ブリュッケ／青騎士） 第8回 キュビズムの多様な展開 未来派／ダダ／ロシア・アヴァンギャルド 第9回 価値の転換 ダダイズムとデュシャン／シュルレアリズム 第10回 純粋絵画とは？抽象表現主義（カラーフィールド・ペインティング／ポスト・ペインターズ・アブストラクション） 第11回 絵画の終焉？ ミニマリズム／ネオダダイズム／ポップアート 第12回 日本の近代絵画① 日本画の誕生 第13回 日本の近代絵画② 洋画の展開 第14回 日本の近代絵画③ 敗戦後の絵画 第15回 まとめ 近代絵画から現代美術へ</p>
授業時間外の学習内容等	授業時間外に、授業で紹介した作品や作者を確認しておくこと。
評価方法	出席および定期試験により評価する。
履修上の注意	
テキスト	必要に応じて資料を配布。
参考書・参考資料等	授業内において適宜紹介する。